

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

捲土重来を期し闘う 高沢寅男……………2

社会党幹部、妥協・修正に動き出す……………4

——トップ会談なるも、自民党一本化難しい——……………7

一月二〇日、結成総会へ……………7

——護憲の社会党を再生する全国ネットワーク——……………8

資料1 「全国ネット」の運動のめざすもの(案)……………8

資料2 「全国ネット」発足総会のご案内……………9

資料3 「全国ネット」組織化のお願い……………10

資料4 「消費税率引き上げ反対」等に関する申し入れ(「全国ネット」……………11

オジロ鷲は全国を駆けめぐる……………13

——音威子府、名寄への短い旅——……………17

読者からのおたより……………17

編集部からのおたより……………3

旬刊社会通信

NO. 556

一九九三年一月二日

一九九三年一月二日発行
(毎月一日・二日・三日発行)

■ 巻頭言 ■

私の決意——捲土重来を期し闘う

高沢 寅男（前衆議院議員）

九月十二日午後六時より、練馬区の石神井区民会館において、高沢寅男練馬後援会の総会が開かれました。この総会で私は、次の衆議院総選挙にむけて戦いの準備を進める決意を表明し、参加された皆さん（尾崎定雄会長を先頭に）の力強いご承認を頂きました。

しかし、九月十七日から始まった秋の臨時国会で、「小選挙区・比例代表並立制」の法案が成立するかどうか。具体的な小選挙区の区割りがどうなるのか。その運営がどういう運営になるのか。……などなど、多くの変化の可能性が考えられます。従って私は、「いかなる事態にも対応できる」ことを念願におきつつ、捲土重来の準備をすすめるつもりです。

それでは、高沢寅男は何のために次の総選挙に挑戦するのか。ただ単に、もう一度国会議員になりたいためか。そんな馬鹿なことが許されるはずはありません。私の目的を要約すれば次の通りです。

第一は、三百万の日本人と、二千万のアジア諸国民の生命の犠牲の上に制定された日本国憲法の危機が迫っているいま、この憲法を名実ともに守りぬき、反戦平和、主権在民、基本的人権保障、地方自治の本旨等々の理念を、わが国の政治、経済、社会の中へ具体的に実現することです。「もはや保守、革新の対立時代は終わった」というのが、マスコミの流行語になっていますが、それは間違いです。護憲の立場は現状維持だから保守の立場だ、という人がいますが、それも間違いです。憲法を守り、その理念を実現することこそが、まさに革新の大義であります。

第二は、「経済成長」「経済大国化」の一本槍ですすんできた日本経済に、いまや重大な転換期が訪れつつあるのに対し、勤労大衆、庶民の生活向上の施策を実現させることです。現在の、長期・深刻な不況は日本経済の変調の曲がり角にほかなりません。急激な円高の影響も重大です。すでに、NTT、新日鐵、東芝、トヨタ自動車など、高度成長の牽引車であった大企業に、赤字決算、生産縮小、人員整理の動きもあらわれています。これに対し、住宅、保育園、特養老人ホーム、心身障害者施設などの、生活、福祉関連公共投資の大幅拡大と、その仕事を中小企業に廻すことにより、日本経済の下からの活性化を推進すべきであります。

所得税減税も断行すべきです。しかしその財源として赤字国債発行や消費税増税をやることは絶対反対です。消費税はさし当たり、すべての飲食料品には非課税とすべきです。減税財源は、防衛費などの不用経費の削減でつくるべきであり、それでも不足ならば、ゼネコンなど莫大な使途不明金を出している大企業に特別法人税を課すべきです。以上の方法で庶民の生活を守ります。

第三は、日本国民の生きてゆける、二十一世紀の国際路線をしっかり確立することです。明治時代の日本は、当時世界一の強国であった英国と日英同盟を結び、その庇護をうけつつロシアと戦い、日口戦争に勝ってアジアの覇権国家となりました。

昭和の日本は、日独伊三国同盟を結び、この同盟を後楯として米、英等の連合国と戦い、

そして大敗北を喫しました。

敗戦後の日本は一転してアメリカの目下の同盟者となり、アメリカ一辺倒の立場でソ連、中国と対立してきました。だが、米ソ冷戦体制の崩壊したいま、日米の貿易経済の矛盾対立が調整不可能な段階にまで至っています。二十一世紀の日本はどうすべきか。答えは一つしかありません。アメリカをはじめ、すべての国と自主的、対等平等の関係を確立し、その上にたつて、アジアのなかの日本として、アジア諸国との友好協力によって生存と発展の道をきり開くべきであります。

第二次世界大戦後のアジアには、低開発国からスタートして、急速に工業、商業、金融業を進展させ、高い成長率によって先進諸国に追いつき追いこそうとするNIEs（新興工業経済地域）諸国が続出しています。韓国、台湾、香港、シンガポール、インドネシア、ベトナムもこの道を進みつつあり、さらに十二億の人口をもつ大國中国もこの道をすすみつつあります。このアジアとの相互信頼のなかにこそ日本の生きる道があります。しかし、そのためにも日本はアジア諸国民に対する侵略戦争をきっぱりと謝罪し、正当なる償いをしなければなりません。この点は率直にドイツを見ならうべきです。

第四は、私の第二の故郷である練馬区、豊島区を、文化の香りと福祉の水準の高い、生活経済の活力のある地域として発展させるため皆さんとスクラムをくんでがんばることであります。皆さんの温かいご理解とご協力、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

◇ 編集部からのおたより ◇

▽鹿児島県の仲間が新聞の切抜きを送ってくれた。「鹿児島県（社会党本部）上村局長に辞職勧告―全国初小選挙区反対行動で」「社党役員に辞職勧告―並立制反対グループ対象に」とのおどろおどろしい活字が大見出しで躍っている。

▽内容は、一月一四日に開く「小選挙区比例代表並立制に反対する国民集会」に関するもの。同集会は毛利淳二鹿児島大助教授、井之脇寿一弁護士、村山喜一前衆院副議長（前社会党代議士）らのよびかけによるといふ。上村氏は新聞の報ずるところでは、青少年局長。久保亘書記長の出身地、鹿児島。

▽社会党への愛党精神は、「小選挙区制導入を葬り去る」こと。小選挙区制で社会党が壊滅することは、「月刊アサヒ」一二月号にも明らか。ところが社会党中央は狂いに狂っている。それは本誌「社会党幹部、妥協・修正に動き出す」に克明に記されている。

▽鹿児島に全国の社会党員が続け！ として社会党の護憲の精神を守りぬけ！

▽忙しい日々がつづく。北海道から山形へ、富山から山形、青森への旅。こここのところ旅また旅。旅窓からみる晩秋の風景。それにあきて文庫本、新書の山また山。

▽最近おもしろかった本。「騎馬民族はいなかった」（佐原真、NHK選書）、「宇垣一成（中央新書）、「昭和研究会」（中央文庫）、「古代社会」（小学館、佐原真）、「歴史家のみた日本文化」（雄山閣、家永三郎）等々。時代におもねない本が面白い。

▽「通信」がふえています。今日一日は特別ですが、合計で一五部。この一週間で三〇部近くふえました。ありがとう。がんばります。さらにふやして！

社会党幹部、妥協・修正に動き出す

—— トップ会談になるも、自民党一本化難しい ——

修正に応ずるか社会党幹部

政治改革四法案は、委員会審議の大詰めを迎え、与野党の妥協・修正の駆引きが本格化している。一月八日から連立与党と野党の自民党との折衝が行われている。最終的には一二日ごろまでに細川首相と河野自民党総裁のトップ会談で決着したいというのが与党側の思惑であるが、どうなるか予断を許さない現状である（九日現在）。

書記長・幹事長クラスで話し合うことになったのは①総定数とその配分、②比例代表を全国一本（政府案）にするか都道府県別（自民案）か、③投票方式を二票制（政府案）にするか一票制（自民案）か、④戸別訪問を認める（政府案）かこれまで通り（自民案）か、⑤選挙区画定機関をどこに設置するか、政府案は総理府、自民案は衆議院である、⑥企業・団体献金を政府案では政党・政治資金団体に限定するが、自民案は政治家個人にも認めるとなっている、⑦公的助成を一人当たり三三五円（政府案）か同じく二五〇円（自民案）か、の七項目である。

与野党の妥協案づくりで最も難しいのはやはり定数問題である。小選挙区の定数を三〇〇に修正しようとする自民に対し、小沢・市川（新生・公明）ラインは、「二七五」の妥協案を考えている模様だ。しかし二五〇（比例も二五〇）の政府案について、社会党は厳守せよと全国大会で決定しており、社会党幹部がこれを認めるという事態になれば社会党内は混乱することになる。また妥協を認めるということになれば党議の拘束力が一層弱まり、分散の傾向を止めることができなくなるであろう。

「細川内閣を守る」という名目で村山委員長など執行部が妥協すれば、執行部自体が分裂状態となり、そこから護憲派の切捨てをねらったの新政構想が表面化しよう。すでに右派各派は動き出している。一方妥協しないということになれば右派の一部は新生、公明、民社さらに自民の一部と連繫して党議を無視して飛び出す可能性がある。

すでに右派の「水曜会」は妥協・修正に応ずるよう村山委員長に申し入れをしている。また佐藤自治相（社会党、四法案の担当大臣）と左近衆院政治改革特別委（社会党の）理事はテレビに出演して「社会党は柔軟に対応すべきだ」と主張し、村山委員長もそうするだろうと強調している。

すでに社会党の井上副委員長と野坂国会対策委員長は新生党の小沢代表と加藤六月代表の兩人と都内謀所で十一月の初めの夜に会談しており、各協議についての打ち合せを終っている。野坂社会党国会対策委員長は村山委員長側近派であり、これまでの「国対政治」の反省のうえに就任したはずであり、相変わらず密室政治をやっているところに党の「後退・埋没」があるのである。井上一成副委員長はもとと田辺派であり、党よりも個人中

心でものごとを考えている人といわれており、ひどい人事で党の命運をかけた局面を迎えたものである。

この村山執行部は、十一月十四日に党の全国代表者会議を開催して政府案の修正に反対の強い各県本部の委員長・書記長クラスの意見を聞くということで三役一任をとりつけようとしている。いわば「ガス抜き」の儀式のようなものである。全国書記長会議よりもっと弱い形で事実上政府案の修正（大幅妥協で年内成立）を認めるものと予想されている。

自民党の内部はバラバラ

自民党は政府案の修正でほんとうにまとまるのであるうか。自民党の与党との交渉窓口は森幹事長だが、一本化されてはいない。交渉窓口には「どこまで政府側から修正をかちとれば党内がまとまるかの見当がつかないのである。自民党内にはいろいろの政策グループが結成され、それぞれが自民党の河野・森執行部に圧力をかけている。慎重派と称する反対派は、「民主政治研究会」（代表・島村宣伸氏）、「政党への公費助成を慎重に考える会」（世話人・深谷隆司氏）、「アジア安全保障研究会」（代表世話人・山崎拓氏）、「大都市出身議員の会」（代表世話人・石原慎太郎氏）などのグループに分かれていて自民党議員の過半数をしめている。したがって自民党の総務会での論議は「修正を認めず、自民党案を堅持せよ」という意見が多数を占めている。

これらの状況からトップ会談は開かれても修正案に向かって一致することは極めて困難である。

これに対して政府と与党、ことに新生、公明の両党サイドからは、年内に成立しないときは「国会解散も辞せず」というドウカツがかけられており、一層対立が激しくなっている。十一月八日には武村官房長官と小沢一郎氏との会談があったが、その一致した見方は「自民党は話し合いに応じる姿勢はとっているが、最終的には修正でまとまるのは難しいのではないか」（朝日、九日）と報じられている。

自民党の小選挙区推進派の動きも盛んである。「政治改革推進議員連盟」（会長・海部元首相）が中心となって若手議員などのグループも加わって連日、打合せの会合が開かれており、場合によっては、政府与党の修正に党議に反しても応じて採択には賛成の側につくことも検討されている。小沢・市川ラインはこの関係から自民党の推進派との裏取引によって、社会党に反対派が出て強引に採択できるとふんでいる、という。しかしそうなれば、自民党は再分裂することになる。小沢・市川氏等の新々党構想が実現するかどうかは、この「小選挙区比例代表並立制」の成否にかかっているだけに新生党、公明党を中心とする「並立制」推進派は積極的に動いている。社会党の右派グループもこれに呼応して、何としても「修正」で成立させようとして会合を重ねている。

水曜会（最右派）が全国総会

社会党の最右翼の派閥の旧江田派、現田辺派は「水曜会」として社会党の右傾化、解党
 Ⅱ保守二大政党制へと進んで来たが、過日の委員長選挙で事実上分裂して勢力を弱めた。
 その原因は総選挙前に「改革議連」を、山岸連合会長の主導のもとに、財界の代理機関で
 ある「民間政治臨調」と提携して結成したことにある。しかし総選挙での惨敗、田辺派議
 員も大量落選した。それまでの「政構研」（反協会連合派閥）も解散した。総選挙の惨敗
 の責任をとらなかつた田辺・山花氏（山岸会長への批判も大きく出る）への非難はきびし
 いものがあつた。そのため山花氏は入閣はしたが委員長を辞めざるをえなかつた。

このような経過のうえでも右派は、社会党内の政界再編勢力を総結集して、社会党を丸
 ごと新々党へ引きずり込もうというのが「水曜会」の再登録である。そのうえで十月二十
 九日に総会を開いたが、参加者は三十人に満たないもので、盛り上がりはなかつた。公式
 発表は衆参合わせて四十人としているが、実際は落選者も加えてのことのようだ。分裂した
 はずの山口、大出の両氏も再登録しており、再び「ビビ」の入った団結が続きそうである。
 そこで山岸氏等労組（連合の）応援をえて地方代議員を集め全国的に右派・水曜会の結
 集をしようということになり、十一月二十日全国総会を開くことになった。十月二十九日
 の総会の出席者は次の通りである。

〈衆議院〉石橋大吉、興石東、大出俊、鉢呂吉雄、大島章宏、田辺誠、岩田順介、田中昭
 一、佐藤泰介、川島実、大木正吾、（落選議員）洪沢利久、小岩井清、（代理）井上一成、
 和田貞夫、中村正男、阿部昭吾、〈参議院〉岩本久人、本岡昭次、谷畑孝、及川一夫、山
 本正和、堀利和、糸久八重子、（代理）角田義一、千葉景子、川橋幸子、栗森喬、の各氏
 である。非議員としては渡辺鋭気企画調査局長も出席して中執の報告をしている。彼らの
 今の方針（建前が強く出て本音はかくされているが）を要約すると、①連立政権に参加し
 た社会党は自らの「理念と基本政策を新時代にあわせて創造的に改革する」ことと、政治
 改革四法案を今国会で成立させるために全力をあげる。②「小選挙区比例代表並立制」は、
 政権を争う政治勢力の結集、再編をもたらすので、「社会民主主義とリベラル勢力の」大
 結集」をめざす。③従来の保守基盤から日本型リベラル派が新たに形成されつつある。共
 通性があるのでそれとの同盟と融合は、政権を担う有力な政治勢力を構成しうる。この戦
 略の実現過程では、「党名の変更を含めた党的抜本的改革」を図る。④「連合」との絆を
 打ち固め、政治的諸潮流との交流、討論を積極的に進める「行動派政策集団」となる。

「水曜会」の田辺・久保・本岡氏ら幹部の意気込みはあつても、もう水曜会は派閥とし
 ては任務を終了している。このなかから新々党に走るもの、小選挙区制度後の方向が見え
 ず消えてゆくものなど、次の選挙でいずれ水曜会議員は社会党から離脱してゆくことにな
 る。社会党を守り主体性をもとうとする人達も少数だがこの派から出てくるであろう。

（社会通信政権研究班）

十一月二〇日、結成総会へ

——護憲の社会党を再生する全国ネットワーク——

“社会党はどうなるの”、党員はもちろん、支持者の思いだ。これまで“社会党は現実的たれ”とパッシング（批判）に血道をあげていた大商業紙も、“抵抗の精神”をなくした社会党、それによる日本政治の右傾化の危惧を抱きはじめてようだ。（「日経」十一月一日）。野党は共産党だけの状況、そしてこの党は“唯一の野党”を強調するが拡がる気配は皆無なのだから。

こうした時、一つのアクションが開始されようとしている。社会党の基本党員は約八万名。協力党員、労組集団入党員は約五万名。協力党員はともかく、労組集団党員（とりわけ全電通、電機連合、地域的には教組、都市交）に“党員の自覚”はない。噂によると“党員であることを知らない”党員もいるといわれるのだから。さきの社会党委員長選挙での東京の全電通、電機連合、兵庫の教組、全電通の投票率は百パーセントに近いという。まさに異常だ。

基本党員は地域・職場で奮闘する。彼らは今の社会党を恥じている。“なんとかしなければ”とがいている。しかし、彼らの意志は労組の集団入党員、というよりもその上部組織に踏みにじられる。その思いはいかばかりであろうか。国民を裏切る切なさ、同じ職場組合員から“あんたそういつているけど、社会党の偉い人はおれたちのこと考えていないじゃないのか”、“もう信じられない”といわれる、このつらさ。バカ花君やオソ松君らの言動のオソマツぶりを一身に背負うのが地域、職場の党員たち。彼らの思いと身をも一つにし、社会党「再生」を勝ちとる！

この思いで今月二〇日、結成されるのが「護憲の社会党を再生する全国ネットワーク」（略称「全国ネット」）だ。

「全国ネット」結成への端初はある県の党員から「東京の党員は社会党が座して死ぬのをみているのですか」との強烈な要請をうけたときだった。それから一ヶ月後、“山岸・日経連の社会党ジャックを許さない”をメインスローガンに、「全国社会党員総決起集会」がおこなわれた。三五都道府県から約八百人が参集。予想をこえる成功となった。

この時の課題は「九三宣言」。社会党の基本政策の全面改悪に対し、「護憲の社会党を守る全国ネットワーク」（仮称）をつくるのが集会後の打ち合わせで確認された。全国社会党員の全国的連絡・情報網をつくろうというのだ。

準備に着手し始めたとき、政治情勢は急展開。内閣不信任案が可決、自民党分裂、解散総選挙というだれも予想しなかった事態がおきたことだ。総選挙、その後の推移は周知のとおり、社会党が小選挙区制という“青酸カリ”を飲まされるまでになった。文字通り社会党は存亡の危機を迎えた。

党員、支持者の不安と危惧はウメキと悲鳴に変わり、“ぼくは支持者をこれ以上だませない”と離党する者もあらわれる事態となった。

「全国ネット」の準備に拍車がかかったのはいうまでもない。呼びかけ人に浅井基文(青山学院大学教授)、伊藤成彦(中央大学教授)、関晴正(前衆議院議員)、田畑忍(元同志社大学学長)、寺田熊雄(元参議院議員)、福島瑞穂(弁護士)、村山喜一(前衆議院副議長)らが顔をそろえ、よびかけ文を発表した(十月末現在、資料3)。

時代は動き、歴史は吠えている。この時登場するのが「全国ネット」。その基本政策を示すのが資料1に掲載した『「全国ネット」の運動とめざすもの(案)』だ。その要点は「内外の社会党解党攻撃をはねかえし、国民の政治を実現できる手立てを取り戻すために、勤労国民の党、護憲の党としての社会党を再生させる。そのための結集体」であることだ。国会情勢は急激に動いている。別稿にあるように、田辺・久保の水曜会、松前抑・伊藤秀子の新政策懇話会は、新生党等との新々党に動く気配をみせている。小選挙区法案を中心とする政治改革法案がどうなるか。それによって、さまざまな事態がおこることも予想される。

「全国ネット」は東京、八丁堀に事務所をかまえ、資料2にあるよう、十一月二〇日(土)午後二時から結成総会を開く。

資料1 「全国ネット」の運動のめざすもの(案)

(一) いま社会党は分散・解体の危機のなかで国民に見捨てられつつある。しかし総保守化体制を強める情勢下にあつて、平和と民主主義、国民の生活と権利を守る「護憲の党」社会党が消えることは、危険な勢力に日本の政治を全面的に明け渡すことであり、改憲への道である。内外の社会党解党攻撃をはねかえし、市民と弱者の政治を実現できる手立てを取り戻すために、勤労国民の党、護憲の党としての社会党を再生させなければならない。そのための結集体が「護憲の社会党を再生する全国ネットワーク」(以下「全国ネット」と略す)である。

(二) われわれのめざす党の再生は、民主主義を徹底することであり、労働運動の蘇生と市民運動の発展を両輪として憲法を活かし国民の諸要求をたたかいたるための日常活動の中からこそ実現できる。このために運動の方針を提起し、共同の活動の範囲を拡げるよう交流、研究を進める。破壊され形骸化された党内民主主義を再生するために、重要な案件は全会員の投票にかけて決めるなど、黨員一人一人の意志を大切に作る作風を確立することも必要である。「全国ネット」は、このような諸運動の活性化と全国化を重視し、そのために必要な体制を確立する。

(三) 当面の運動の目標

① 真に必要な政治改革とは、企業・団体献金の即時全面禁止などによって、抜け道のない政治腐敗防止案を実現することである。価値観が多様化しつつそう多党化した今日、民意を反映しやすい選挙制度としては、完全比例代表制をとるか、あるいは日本の条件に適した中選挙区制を再評価するべきである。大量の死票を生む小選挙区並立制と関連四法案については、違憲性をはじめとした重大な問題を明らかにし、国民世論を喚起し発展させねばならない。

② 憲法第九条の改悪を阻止するとともに、人権と民主主義と平和主義に関して、憲法を擁護し活かす諸活動を継続的に推進する。

③ 自衛隊や自衛隊機の海外派遣を中止させるとともに、率先した軍縮の推進と、武器輸入の禁止、軍事基地や安保条約の解消を求める。世界の諸国には、武器輸出入の禁止と軍事行動の中止と核兵器の廃絶と全面軍縮を働きかける。日本の過去の戦争責任を明確にし、各種の戦後補償を実行させ、被爆者援護法も速やかに成立させる。

④ 消費税は税率の引き上げを阻止し、食料品等の非課税化と、さらには全面廃止をめざす。所得税減税は、低所得者層を対象に課税最低額を引き上げる。財源は、租税特別措置の整理、高級品・奢侈品に対する新物品税（個別消費税）の導入、法人税率の累進税化、法人税（所得課税）を補完するものとしての大企業等に対する財産課税の整備などである。

⑤ 原発の新設は認めず、問題の多いものから休・廃止させ、脱原発を進める。危険で経済性のないプルトニウム利用も、そのための再処理（施設の建設）も中止させる。省エネ、節エネをはかり、高効率・低公害のLNG（天然ガス）火力の新設を進めつつ、ソーラー発電等の更新性エネルギーの開発利用を積極的に推進する。

⑥ 日本の環境とともに地球環境を守り改善する。宇宙船地球号の安全な航行のためにN.G.Oや市民運動と積極的に連携し、「人間の活動に対する自然からの制約をどう受け入れるか」という課題について人類的合意をうみ出す政治文化」を創造する。

⑦ 米の輸入自由化に反対し、減反と過少備蓄を正し、農業と水と緑と環境を軽視する政策を根本的に改める。緊急対策によって、冷害地域の農民の所得と生活を保障させる。

⑧ 女性に対するあらゆる差別を撤廃し、人権を確立する。均等法を改正して実効ある男女雇用平等を実現し、また不安定な雇用形態の野放しによる差別を禁止するための法整備もはかる。政治や社会への女性の参加と意志反映を促進するため、政党等にクォータ制を採用させる。

⑨ 労働者を犠牲にする人減らし合理化に反対し、時短を推進し、雇用と健康な労働条件を保障させ、職場に民主主義と人権を確立する。権利春闘を前進させ、国鉄闘争をはじめ不当解雇撤回闘争で勝利する。年金制度は改悪ではなく改善をはかり、差別を許さず、弱者や高齢者の福祉を増進する。

⑩ 以上のような目標のもとに同志の結集のためオルグ活動を強め、討論集会、研究会などを開く。各地域と職場に「全国ネット」の会員を広め、ネット化を推進する。

資料2 「全国ネット」 発足總會のご案内

秋の紅葉をゆっくり愉しむ間もなく冬が巡ってきてきそうな気配です。不況が淀んだように腰を下ろした暗い世相。永田町の政界ばかりが右往左往の活気を呈しています。

細川連立政権になって、国民にとって何かいいことがあったでしょうか。理想と希望に満ちた生活が将来に約束されているのでしょうか。三八年間も続いた自民党一党支配が終ったことを歓迎し政治に変化を求めたはずなのに、連立政権は国民の期待を裏切り財界

本位の危ない政治をめざしています。

国民がやりきれない思いで批判した腐敗政治の温床である企業献金と政・官・財の癒着構造は温存されたまま。保守二大政党制をつくり、諸外国で見直しの機運が高まっている小選挙区・並立制を導入。国による政党の買収といわれる「公費助成」。自衛隊法一〇〇条改悪によるPKOの野放図な拡大。日の丸、君が代の法制化。どれをとっても憲法違反の大問題ばかりです。

底無しといわれるこの不況でホワイトカラーをターゲットにした人員削減を伴うリストラ攻勢。かつてない超低金利政策による金融資本優遇策。農業不況を慈雨にコメ市場開放の動き。そして、所得税減税をエサにした消費税率の大幅引き上げ。財界・大企業を救済し、働く国民に犠牲を転嫁しようとする政策が目白押しです。

自民政権下でなしえなかった政策を、国民的人気を背景に細川連立政権下で一挙に実現しようと企んでいます。

国民生活の危機、民主主義の危機を迎えたこの重大な時期に、皮肉にも社会党は衰亡の道を歩んでいます。社会党の衰亡は、悪政にたいする社会的抑止力が機能しなくなることになりません。私たちは平和と民主主義、憲法と暮しと人権を守ることを基本的に社会党の再生に全力を注ぎます。

「全国ネット」の発足は内外から注目され、熱い期待を担うことになるでしょう。党員党友の皆さん！ 結束して立ち上がりましょう。

一九九三年一〇月

【「全国ネット」呼びかけ人】浅井基文（明治学院大学教授）伊藤成彦（中央大学教授）

関 晴正（前衆議院議員）田畑 忍（元同志社大学学長）寺田熊雄（元参議院議員）村山

喜一（前衆議院副議長）福島瑞穂（弁護士）*一〇月現在、順不同。

一、と き 十一月二〇日（土）午後二時～5時

一、と ころ 国労会館八階ホール *東京駅八重洲南口から徒歩三分

一、お問い合わせ 護憲の社会党を再生する全国ネットワー

電 話 〇三（三五五二）三九八〇 FAX 〇三（三五五二）六四〇六

資料3 「全国ネット」組織化のお願い

拝啓 連日のご活躍、ご苦勞様です。

さて最近の社会党は、選挙で大敗して主導権を失ったのに、閣外は々々非々協力を越え、背伸びして入閣したことによって、大切にしてきた基本的政策を惜し気もなく棄てている有様です。さらに小選挙区並立制によって消滅させられそうです。

私たちは、朝日新聞（九月三〇日）やエコノミスト（一〇月五日号）の田辺論文ではなく、石橋論文をとりたいたいと思います。社会党を解党し保守新党に統合するのではなく、護憲の党を早急に再生することによって、国連の安保理常任理事国入りに際して必ずかけられる改憲の攻撃を、毅然と迎え撃つなかで、躍進し勝ちぬかなくてはなりません。

小沢一郎氏の構想通りに護憲の党が死滅させられないために、皆さんの尽力によって、都道府県内の同志に呼び掛け、貴県にも大きな「護憲の社会党を再生する全国ネットワー

ク」を早急に組織して下さるよう訴えます。

なおすでに衆・参の二〇名近い現役国会議員の皆さんからも、賛同と協力を得ています。

一九九三年一〇月二一日

呼び掛け人

前衆議院副議長 村山喜一

前衆議院議員 関 晴正

元参議院議員 寺田熊雄

同志社大元学長 田畑 忍

中央大学教授 伊藤成彦

明治学院大教授 浅井基文

弁 護 士 福島瑞穂

(順不同)

資料4 護憲の社会党を再生する全国ネットワーク(準備会)

「消費税税率ひきあげ反対」等に関する申し入れ

一九九三年十月二七日

村山喜一・関 晴正・寺田熊雄

日本社会党中央執行委員長 村山富市殿

私たちは、社会党が「細川連立政権を守るため」として、小選挙区制反対などの基本政策を次々に変更していくことに重大な懸念をいだいている。それは、国民生活に重大な影響をもたらすとともに、社会党の存在意義を失わせ、さらには、憲法の実質的改悪がいつそう進むことになるからである。

本日、私たちは、当面している政治改革、自衛隊法改正問題、所得税減税および消費税問題につき、以下のとおり申し入れるものである。

(一) 政治改革法案について

国民が政治改革によせる最大の期待は、政治家とカネの汚い結びつきをきっぱり断ち切ることにある。ところが、今回の政治改革法案は、これを断ち切るどころか、金権選挙をいっそう助長することになることが、国会審議の中で明らかになった。第一に、奄美選挙区の実態を、当の保岡興治代議士が告白したように、「小選挙区制の方がいっそう金がかかる」のである。第二に、我が党の秋葉忠利代議士が明らかにしたように、「政治家個人への企業献金は禁止する」といっても、政治家への献金が政党への献金とみなされることになっただけのことなのである。第三に、「個人への企業献金の禁止」といっても「政党の支部という名の政治家個人への企業献金」に形が変わるだけなのである。

このように政治家とカネの問題については、解決どころか一層悪化することが、はっきりしてきたのである。ついては、党は国民の期待にこたえ、一連の法案に反対するよう方針を変更すべきである。

それが困難な場合は、法案を修正し

① 企業献金禁止を明確にすること

② それも困難であるならば、少なくとも「政党の支部への企業献金」などは明確に禁止するなどして、個人への企業献金を実質的に禁止する措置をとるべきである。

(二) 所得税減税について

国民のくらしを守り、また、景気回復に資するためにも所得税減税は一日も早く実施すべきである。その際、減税は伝えられるような「上に厚く、下に薄く」ではなく、低所得者層や年金生活者にこそ手厚い減税を実現すべきである。具体的には、次の点を申し入れるものである。

- ① 減税の方法は「最高税率の引き下げ」方式をとるべきではない。課税最低限を引き上げることによって減税すべきである。
- ② 財源は、「不公平税制の是正」によって十分に確保できるのであるから、消費税の税率ひきあげはもちろん短期赤字国債発行などによるべきではない。
- ③ 以上二点の申し入れの参考資料として「不公平な税制をただす会」の提言を添付する。

(三) 消費税の税率引き上げ問題

消費税は、憲法違反の悪税であって廃止すべきである。税率が三%、税収六兆円弱の現在なら、廃止することは十分に可能である。したがって、党は、廃止の方針を堅持し、所得税減税（五兆円）の財源には消費税率引き上げによってではなく、「退職手当引当金や貸し倒れ引当金などの租税特別措置を廃止しないしは、実状に基づいて見直す」だけでも確保できることを提言し、実現すべきである。具体的には、

- ① かつて参院で可決された消費税廃止法案を再提出すること
- ② 政府税制調査会に「消費税廃止」論者も加えるよう政府内で主張し、推薦すること
- ③ 消費税に変わる財源について広く各方面の提言を受けつつ、党としての方針を確定すること。

④ 伝えられる政府税制調査会の素案（所得税減税については、税率の三五%、二〇%、一〇%の三段階への引き下げ、消費税率の三↓七%への引き上げ）が、そのまま実施された場合は、給与所得者の九〇%をこえる年収八〇〇万以下の人たちは増税になる。党は、この素案については断じて認められないことを一刻も早く、内外に明確にすべきである。

(四) 自衛隊法一〇〇条改正問題について

邦人救出のため自衛隊機を海外に派遣する自衛隊法一〇〇条改正案については、これまで通り「反対」を堅持すべきである。

「緊急時における邦人救出のためには、民間機によるのが安全で確実であり、軍用機や政府専用機はきわめて危険である」と関係者や専門家は本法案への懸念を表明している。

（例えば、元日航機長、自衛隊出身操縦士会元副会長、信太正道氏の十月十三日付「朝日新聞」論壇への投稿）

「内乱などをふくむ戦時において文民は戦時における文民保護に関する一九四九年ジュネーブ条約）があり、国際法によって保護が約束されている。したがって、政府は、まず外交手続きにより、文民保護を紛争当事者に要請し、その後、適切な国際機関に仲裁・保護を求め、中立機関の保障を得た航空機によって輸送するのが、より安全で確実である」という提言などに耳を傾け、「自衛隊の海外派遣反対」の党の基本方針で堅持すべきである。

以上

オジロ鷺は全国を駆けめぐる

——音威子府、名寄への短かい旅——

実りの秋、全国をたび回った。いつもなら目もくらむばかりの紅葉がナナカマドの紅葉が、心をなごませてくれるのだが、豊作を祝う気分はない。真つすぐに伸び切った稲穂、刈り取られた稲が夕暮の太陽を背景に黒いけむりを上げる。コメの凶作はますます深刻化する不況に、重く暗くのしかかる。

社会党、労働運動の動向も重く暗い。金竹小に軸足を移す三宅坂、次々と姿を消す地区労・県評センター。不況にあえぐ勤労諸国民の背後で、「平和の砦」「護憲の砦」が姿を消しつつある。アセリと不安、なんとかしなければとの熱い思いが錯綜し、地域・職場の仲間的心も千々に乱れているにちがいない。こうした思いで、北海道の音威子府、名寄、旭川、札幌等を訪ねた。

国鉄闘争の拠点——音威子府

二十分遅れで羽田を出発。三時ちよつと過ぎに旭川空港に着く。二人の友人、高橋さんと宗原さんが出迎えてくれ、その足で車へ。旭川から音威子府は釣談議に花を咲かせ約三時間。会場の音威子府公民館に着いたのが午後六時。

音威子府は人口千五百人にも満たぬ小さな村。この村が今や国鉄闘争の拠点となり、村は全国的知名度をもつようになった。国鉄闘争、清算事業団闘争、国労闘争団による自活体制のとりくみ。もう十年をこえる。闘争団員、そして家族の悩み、苦しみはいかばかりであっただろうか。

この地にくる楽しみは彼らと彼らを支える仲間の成長だ。人間としてドンドン大きくなっていくことだ。羊かん工場も大きくなった。腕もさえてきた。木工工場も次つぎ設備を改善、活気にあふれる。滝野さん、今度オジロ鷺の一刀彫りをつくり、昨日とりつけたんだ。見てくれたと語る石原さん。どこにあるの、見てないよ。宿にあったのと私。じゃ見に行きましょうと案内してくれた。車で走ること約十分。天塩川温泉の少し上のバンガローにあった。丸丸太ったオジロ鷺。こんなに肥えてるの。そうですよ。大きいですよ、岡田さんがつくったんです、と。鋭い口ばし、そして眼光。音威子府闘争団の魂そのものと感じた。

このオジロ鷺は国労闘争団の闘いの前進とともに、全国を飛び回ることだろう。いや必ずそうなる。私を得た感触がそれだ。音威子府では「社会党を支持する音威子府地区青年共闘会議」主催の講演会、音威子府地区労会館での交流会に出席。講演会には約七十名が、交流会には二十数名が出席。その明るく活気に満ちていること。さらに「じっくり煮込んでおきました」という、オデンのウマかったこと！

地域から社会党、護憲の旗守る

音威子府の仲間の気分をあらわすのが宗原さんの開会あいさつ。私なんかの話よりもずつとずつと優れている。彼の原稿をそのまま紹介する。

講演会に参加された地元のみなさん、又、浜頓別、中頓、中川、美深、名寄の地域からも参加して下さった仲間のみなさんに心から敬意を表します。

開催にあたり青年共闘会議を代表して今講演会の位置づけについて申し上げ、あすから私達の職場・地域運動に役立てるために今何が大切か、又重要なのかについて確認しあっていきたいと思います。

すでにみなさんもご存じのとおり、七月に行なわれた第四十回の衆議院議員選挙において、社会党は結党以来の大きな敗北・惨敗という事態を受けました。

一四〇の議席数が七〇議席までにおちこみましたが、一方で自民党の一方支配体制も実に三八年ぶりにくずれ、片山内閣以来の連立政権がヒニクにも生れたわけです。

その後今日まで、社会党のひょう変ぶりには日々おどろかされるばかりか、自ら解党の道をたどりながら、一体どこへ行くかとしているのか、有権者のみならず、私も含めた黨員でさえわかりかねる言動が非常に多くなっています。

党内民主主義が増々先ぼそり、中央集権化していくばかりでその勢いが、今大きな問題となっている選挙制度の改悪、「小選挙区比例代表並立制」導入に党として賛成の立場をとらせているといっても過言ではありません。

社会党は、その制度がどんなに悪法で矛盾があり、憲法違反のうたがいがいも強いものか、また非民主的な制度で誰が一番得をするのか充分知っているはずですが、

ですから、第五七回臨時全国大会で反対・導入阻止を決議したのです。それが今、連立政権与党第一党として毒だとわかっていても飲み込めずかかないそんな態度でいます。与党第一党であるなどと言って私達支持して来た者や有権者に「まとも」なことを言っているつもりでしょうが、そのこと事態がすでにまともには思えませんし、聞こえない、つたわらない、というのが事実であると思います。

毒だとわかっていても飲み込まなければならぬものは、今後増々増えつづけます。今国会の中でも、すでに並立制を大きな目玉にして「自衛隊法改悪」という大きな毒も飲み込まれそうですし、米の輸入をはじめとしたハドメなき市場開放、消費税率のアップが取り引き条件の所得税減税、そして二七日に終了答審された「行革審」などまさに、社会党は一日も早く死んでくれと言わんばかりに毒をもられ、わかっているながら飲み続ける、しかし、この飲まされていく毒は社会党だけにきくものではなく、そのことによって法が改悪されて行くために私達一人ひとりの生活・暮らしに影響するばかりか、職場の実態にも大きな攻撃を加えることになるのです。

こういった政治の流れにあって労働組合の力量の發揮、その存在感が大きく問われる訳ですが、しかし、連合は労働者の立場に立って、物ごとを考えることは結成以来から何一つなく、政治への口出しばかり行っています。

口を出せば出すほどに政治が悪い方向へむかっている、これが現実です。

現に、この連立政権を作り出すために、かたよった報道をしたとして今問題になっているマスコミのあり方よりも、もっと上げつない衆議院議員候補者の選別支持を行ったのです。

このように今、日本は政治もそして労働運動もすべてが資本主義体制をどう維持さ

せていくのかということだけに集中しています。また自由経済体制をまもるため独占資本も動いているのです。

しかしこの体制が続くかぎり私達の職場や生活から搾取はなくなりませんし、平和はおびやかされ、教育は腐敗し、大量の労働者の首切りが更に続くこととなります。

私達は、今日のこの講演会から、改めて資本の狙いと政治動向の関係、そして、労働運動の流れの今後のゆくえをしつかりと学び合いながら、この地元から労働運動を強化し、政治闘争との連結を現実のものとしなければなりません。

先に中頓別で行なわれた「護憲・平和・地域労働運動を考える道北シンポジウム」の中で前衆議院議員上田哲氏が訴えられた、政治は大政翼賛会化、労働運動は産業界報国会化して来ているその自身が、この地元でも発生しているのではないのか、という危機意識を持って、本日の講演を果のあるものとしていただけるよう真剣にお願いし、開催にあたってのあいさつとします。

今後とも、共に頑張りましょう。

名寄闘争団は新事務所設立

翌日、音威子府闘争団との現地交流。一年に一回のわりで訪問しているのだが、その発展ぶりには驚くばかり。昼、私の大好物の音威子府そばをごちそうになり名寄へ。

名寄までは車で一時間三〇分。運転手は宗原さん。車中は相変わらずの釣談議。朝行ったんです。バラしちやった、残念と。これまでの獲物で最高は七六センチ、去年は十三本上があったが、今年はまだ三本。これからが最高のシーズンとのこと。今度くるときは連れてってよと私。

名寄での講演会は名寄センター青婦協平和友好祭実行委員の主催。平均年齢は二五歳、全林野、全通、国労、自治労を中心に百三十人くらいの仲間たち。一九四五年生まれの私はまさにオジサン。

名寄の町はどこかさびしい。社会党総支部委員長の岡村さんは、人口が三万人をわりました。五万人いたこともあったんですよといわれる。その一方で自衛隊は白昼堂々完全武装で訓練するんだ、こんなことは今までなかったと顔を曇らせる。

名寄での楽しみは全国にさがり九月につくってくれた「社会通信読者の会」の仲間たちと会えることだ。大きく伝えたことはないのだが、この記事を見た全国の読者から「私のところでも計画したい。宣伝誌を」との嬉しいたよりをいただくようにもなった。闘争団事務所訪問もこの旅の目的の一つ。今年移転したばかりで、これまでの事務所と比べると広く明るい。西原団長によると「前はただだったが、今度は少しばかり経費が必要ですよのこと。

社会党解体は働く者の権利破壊

名寄の仲間も、音威子府と心は同じ。集会は「国鉄闘争を柱に職場・地域から反行革統一闘争を闘い抜く決議」「小選挙区比例代表並立制に反対し、社会党の階級的強化をかちとる決議」の二つを採択。青年たちの熱い思いで貫かれている。「小選挙区制反対」を全

文掲載し、彼らの活躍を乞う。

国会会の最大の焦点は選挙制度の改正であると言われている。選挙制度の改正は「政治改革」の一手段であるはずだが、現在では「政治改革」選挙制度改革Ⅱ小選挙区比例代表並立制」という流れが作られて来ている。もともと政治改革問題はリクルート問題・佐川疑獄などの自民党と独占資本が一体となった腐敗政治・汚職政治の責任を追究し、その本質を明らかにして行くことが重要な課題であった。自民党金権政治こそが問題であるにもかかわらず、「中選挙区制はカネがかかる。だから政治腐敗が起きる。だから小選挙区制を」という一般論にすり替えられてきた。しかもその中では小選挙区比例代表並立制の持つ「民主主義の破壊」とそれに伴う危険性についてはあまり大衆的になっていない。

最大の問題点は「膨大な死票を生み」「少数意見を切り捨てる」制度であるということである。一選挙区一議席であるから複数の政党から立候補者があって、たとえトップが三割程度の得票しかなくてもそれでその選挙区の議席はその候補に確定する。その候補以外に投票した残りの七割は死票となる。この制度で勝利するのは大政党Ⅱ自民党であることは言うまでもない。新聞社などの試算でも多党制の下では、自民党は三割台の得票で八割以上の議席を獲得することが明らかになっている。「自民党は支持しない」という七割の票は「死票」「少数意見」として切り捨てられることとなる。ここに小選挙区制の反民主主義的性格が端的にあらわれている。

もう一つの大きな問題は「大政党に有利」という性格上、自民党に対抗するため現在の連立政権から統一新党を作るか、または連立政権政党間の選挙協力という形にならざるを得ない。「統一新党」となれば社会党が掲げてきた「護憲」「民主主義」など我々にとつては当たり前の主張はできなくなるのは明らかである。統一新党としては現在の連立政権の政策を踏襲し保守的な政策になることは必然的である。また統一新党を作らず、連立政権政党間の選挙協力に対抗するとしても新生党や日本新党が保守党である以上、その支持層が自社の二者択一で社会党支持とはならないと考えるのが自然である。それどころか我々が選挙協力で新生党候補の支持をしなければならぬことさえ想定される。これでは社会党の勝利どころかその主張すら困難になってしまう。ましてこの小選挙区制によって社会党が解体の危機にたたされているといわれる現在、だまって見過ごすことはできない。労働者とともに平和と民主主義を守る闘いの先頭に立ってきた社会党が弱体化したり解体という事態になれば憲法改悪が具体化してくることは間違いない。また職場の合理化が加速され、ますます働き続けられない実態が作りだされることも明らかである。

我々は、小選挙区制の持つ反民主主義の本質を大衆的に広めながら、その阻止に向け闘いをつくりくるとともに、さらなる社会党の階級的強化をかちとるため全力をあげよう。

右、決議する。

一九九三年十月三十一日 第一八回名寄ブロックセンター平和友好祭

今度はぼくらが問われる

翌日は名寄から旭川へ、旭川から札幌へ。ゆっくり腰を落ちつけ語り合うにはあわたたしすぎた旅だったが、旭川では我らの大アネゴ、菅原須磨子女史とも十分ほど語り合うことができた。「身体気をつけなまきやだめよ」とキツツイ注文を受けたのだが。

世はまさに激動期、藤村の「夜明け前」ではないが、歴史はわれわれに試練をつきつける。歴史の波に飲み込まれ自分を見失ってしまうのか、それとも歴史を切り拓く力を激しい討議と行動の中でつくっていくのか。これまでの闘争団の仲間の努力が今度はわれわれに問われる。そうした思いを深くし、「乗り切れる」ことを確信したのが今度の旅の大きな成果だった。

(滝野 忠)

◇ 読者からのおたより ◇

党の現情 党の現情、いっそう厳しくなっているおり、信念をもったご活躍に敬意を表します。私たちも労働者の良心を裏切ることのない活動をと心しております。(千葉・O)

編集部より どこへ行っても社会党、労働運動への心配ばかり。心配ばかりでは前に進みません。論議し、方針を決め、力を合わせ行動しましょう。

私たちの方針 情勢としては十一月から下旬にかけて連合地区組織の結成が行なわれ、一方では地区労が解散、また「不一致」課題の運動構築のために平和運動センター地区組織も結成され、地域労働運動の転換を迎えている。この情勢を受けて、各地で具体的討論を行い、今後の運動のあり方について苦勞しながらも進めているが、気がかりなのは持ち込む中身の討論よりもまずは器を作ることの方が進んでいる状況だ。このまま器だけ進めると大切な運動の原則や主たる方針が見えなくなり、当面する運動をどうするか考えられずうわついたものになる。

我々には長い間、指示・指令待ちの状況の中に身を置いていた。総評という組織からの指示・指令と単産からの指示・指令には運動の高揚期にちがいがなかった。しかし今、連合という労働界の流れが入り、その指示・指令もなくなり、労働組合の闘争方針も当然気弱になる。今、我々は下からの運動づくりが求められている。

(北海道・M)

編集部より 指示・指令待ち運動の克服。云うはやすく実行はむつかしい。話し合い、闘い、私たち自身一回り二回り大きくなりましょう。

主人公にふさわしい知識と教養、モラル 社会党が連立政権に参加し、良いこともあるし又困ったこともあるという声を聞きます。しかしながら、連立政権に参加する代償として、社会党は「毒入り饅頭を食った」、「青酸カリを飲んだ」という声を聞くように、「小選挙区比例代表並立制」の導入を認めることは、「社会党解党への道」を選択するに等しいと言えましょう。連立政権に加わることは「肉を斬らしてもらって、骨まで斬られる」と以上でも以下でもありません。

社会党は九一年の臨時党大会で、小選挙区制の導入は民主主義の根幹に関わる問題であり、断固反対である旨の決議をし、今年四月六日の社会新報でも当時の委員長である山花

氏が、同じ趣旨のことを述べていました。ところがなんと豹変ぶりでしょう。大臣の椅子がちらついたとたん「節操も何もなくなった」と言われても仕方のないような、社会党中央の対応ではありませんか。社会党がなくなっても、それはそれでいいのかも知れませんが、「護憲の社会党」を支持してきた一、〇〇〇万人の有権者に対する責任は、どうなるのでしょうか？ 労働者勤労国民の生活はだれが護るのでしょうか？ 独占資本は、「護憲の社会党」の解体を最大の戦略目標にしてきたわけですから、棚からぼた餅に違いありません。

いま、私たちに求められていることは、「小選挙区比例代表並立制」がいかに非民主的であるかを学習し、認識し、職場・地域で広めることだと思っております。学習資料を送付いたします。是非じっくり読んで、この選挙制度がいかに非民主的な制度であるのか、これにより「護憲」勢力がどうなるのかを考えてほしく思います。

「労働者は社会の主人公だ」と言うのですが、労働し生産現場で社会の富をつくっているだけで、「主人公」にはなれません。主人公にふさわしい知識・教養・モラル等を身につけずに、主人公になれるはずがありません。私たちにとつても、正念場ではないでしょうか。

（長野・N）
編集部より ワープロははじめられたんですって。私はまだ。おっしゃるとおり、勉強が足りないのは私たち。私の愛読書は考古学。佐原真の分析が面白い。

地区労働運動すめる 早い情報ありがとうございます。当地も十一月に平和センター、連合の結成があります。地区労働運動の継承・発展を今以上に力強く進めていきたいと仲間達と語っています。先日は十・二一国際反戦デー占冠集会を道議の渋谷さんを迎えて学習会を開きました。八〇名参加。新ためて党の強化・発展を誓ったところです。 （北海道・I）

編集部より 先日、同じような学習会で音威府、名寄を訪問、血気さかんなのにビックリ。報告にあるとおりです。

楽しみは「通信」 さきの情勢がみえにくい中で、「通信」を楽しみにしております。党の「再生」を信じつつ。また一年間よろしく。唯一まともな情報源としてホツとしています。 （高知・O）

きびしい情勢ですが、適確な情報に接し、また各地のたたかいを知り、元気ができます。がんばりましょう。 （東京・Y）

編集部より うれしくなるお便りの数々ありがとうございます。読者をふやして。原稿も。

誤植と訂正、おわび

滝野さん、誤植あったよとよくいわれます。ごめんなさい。校正は一回しかしていないのです。次のように訂正し、おわびします。

第五五四号、三ページ、十行目。ピニール宮殿の東↓裏手、同、シュプレー川の樹↓橋のたもと。

第五五三号、四ページ、後ろから九行目、常に↓党に。五ページ、後ろから一四行目。選挙協力がなければ↓なれば。